

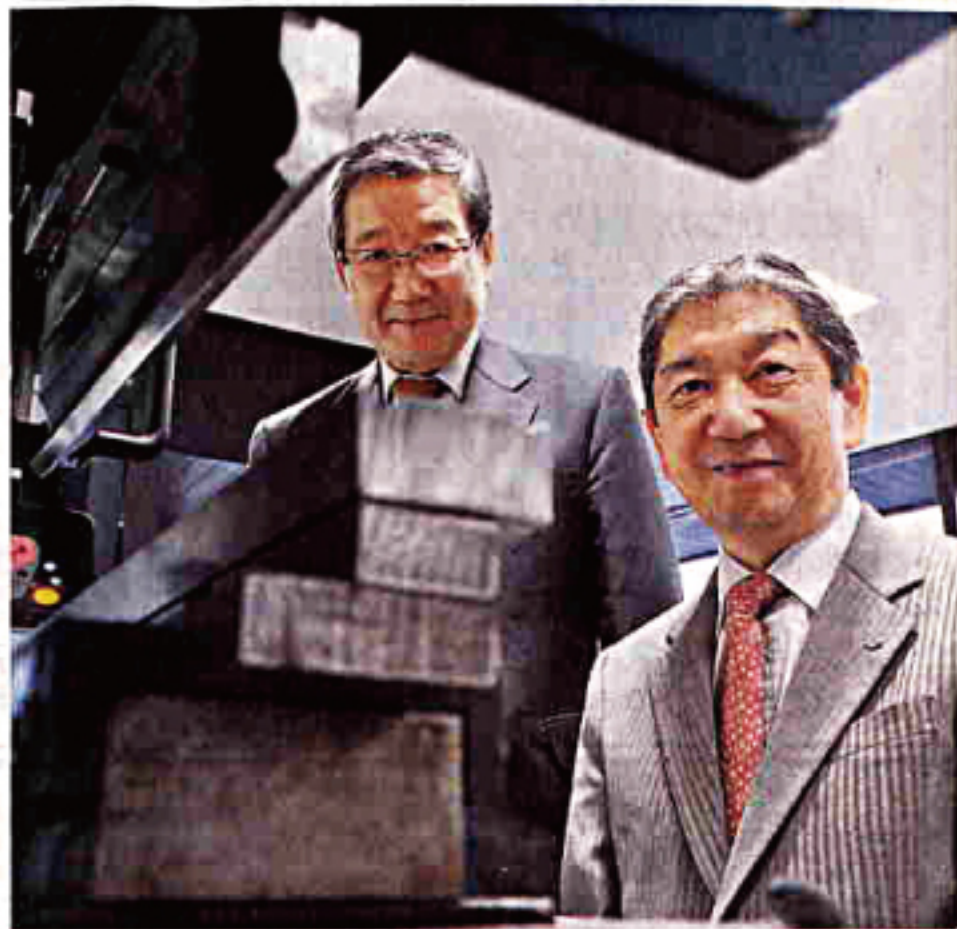
指守り抜くこれが天命

安全第一⑥

人・脈・記

ニッポン

jinmyaku@asahi.com



小森雅裕さん(左)と明彦さん

東京・西浅草の善龍寺に

「指塚」はある。建てたのは小森武彦。隣に立つ小森家の墓に眠っている。

昨年9月のお彼岸、武彦の次男明彦(58)は指塚の前を歩く初老の女性と20代の男性を見かけた。

母親らしい女性が言った。「いいがあるじゃない。あなたも指がないんだから、押んでいきなさい」。男性は指塚に向かってしばらく手を合わせていた。

指塚の裏に武彦の言葉が刻まれている。(幾多の人々がプレス災害により指を失い不具者となりたるを思いその不幸をいたみここに指塚を建立するものなり(原文))。塚の下には武彦が開発した安全装置が埋まっている。

戦後の混乱期、武彦は竹細工の製造販売を手がけた。その後、せんべい屋を経てプレス加工を始める。

ところが、叔父である工場長が機械で指を3本落とすと、プレス加工をあっさり廃業してしまう。指が10本あるプレス工は一人前とは思われない時代だった。

ほどなくして武彦は安全装置の開発に乗り出す。「そうだ。プレスの安全機を作るのだ。これが私に与えられた天の使命である」と後に記して

いる。

プレス機械は上と下に型があり、その間に手で材料を入れる。当時の機械は、足でペダルを踏んで型を動かした。手が残っているうちに上型が落ちてくると、指を切り落としてしまう。

手があるときには型が動かないようにすればいい。武彦は1952年に1号機を完成させる。その後、手を外に出すと同時にスイッチを操作することで型を動かす装置を開発。作業効率が落ちないため、ヒット商品になった。

国もプレス機の災害防止に動き始めた。武彦は労働基準監督署が開く講習会に講師として呼ばれるようになる。長男の雅裕(61)もよく連れていってもらった。「講習会が終わると、安全装置を注文する人が行列をつくっていた」。幼心に焼き付いた光景は今も忘れられない。

武彦が設立した小森安全機研究所は、雅裕から明彦に引き継がれた。今ではプレス機械のほとんどは電子制御にな

り、安全装置は光学式が主流になっている。

マスクや安全帽、命綱、安全靴……。働く人の安全と健康を守るためには質の良い保護具が必要になる。56年、保護具メーカーが情報交換のために「みどり会」をつくった。幹事長に就いたのが、マスク専門メーカー重松製作所を設立した重松健造(83)だ。三男で相談役の開三郎(83)がよく聞かされた創業当時のエピソードがある。

健造は輸入した理化学品を販売する会社に勤めていて、セールスマンとして様々な工場に出入りしていた。

めっき工場の食堂で、若い工員が弁当箱を開いてたくあんをかじっていると、熟練工が言った。「たくあんがかじれるようでは一人前じゃないぞ。おれの歯を見る」。熟練工の歯はポロポロ。めっきで使う酸の霧の影響だった。

なんとか被害を防ぐ方法はないか。1917年に独立した健造は、アメリカからの輸入品を参考にして防じんマスク作りを始めた。海綿で作ったマスクは、ブタの鼻に似ているため「ブタマスク」とあだながついた。

国が発展するには良い製品を作る必要がある。良い製品を作るには熟練工が必要だ。せっかく経験を積んだ熟練工が職業病になってしまったのは日本の産業が駄目になる。「これが父の考えだった」と開三郎はいう。

みどり会は日本労働災害防止推進会と名前を変えて活動を続け、今は45社が加盟している。

(沢路毅彦)



重松開三郎さん

